

才能開花陸上で全国へ

つなぐ

神奈川と共生

外国ルーツの子どもたち ③

昨年の夏、ヨシ(17)は  
 県内の定時制通信制高校  
 の陸上大会で優勝し、全  
 国大会の舞台に立った。  
 だが中学生の頃は裸足で  
 家を飛び出し、公園で野  
 宿も経験するような生活  
 を送っていた。

家から逃げ出した。  
 そのまま卒業したばか  
 りの小学校までたどり着  
 いた。インターホンを押  
 すと、担任だった女性教  
 員が出てきてくれた。足  
 の裏は真っ黒。「落ち着く  
 よ」とあめをもらい、いぬめ

高校3年のヨシはフィリピン人の母と日本人の父の間に生まれた。幼少期から乳児院や児童保護施設の出入りを繰り返した。実父の記憶はなく、母親は家にほとんどいない。代わりに幼い弟2人の面倒を見ることが多かった。

ていると涙がこぼれた。それから2カ所の児童相談所の一時保護所に入り、約1カ月を過ごした。「保護所では悪口も言われないし、歯磨きもできる」。自身にとっては「快楽」だったと振り返る。自宅は日用品も不足し、当然、歯磨き粉もなかった。

中学校の入学式から一週間がたった時のこと。母が「弟の面倒みて」「早くして」と言い、たたいてゐることが続いた。家族が暮らすマンションの一室で「ロボットのよう

に扱われていた」という。ヨシは部屋を出て、火災報知機を押した。シリシリシリ……。警報が鳴り響く中、靴も履かずに

母は「もう嫌なことを言わない」と約束し、ヨシは家に戻ることになつた。その帰り道、初めて外国にルーツを持つ子ともとその家族を支援する信愛塾（横浜市南区）に寄り、竹川真理子センタ―長と出会った。

それからヨシはたびたび家出した。公園の遊具の中で夜を明かしたこ

## ヤングケアラー 繰り返し家出、野宿も

ともあった。「蚊に刺され 買う程度だった。」

るし、明るくなるとすぐ目が覚めた。3時間くらいしか寝られなかった」

家出をするを決まって竹川さんに電話した。迎えに来てくれたり、母を説得してくれたりした。

ヨシは中学3年で陸上部に入り、砲丸投げを始めた。鉄の球を投げる部員の姿にひかれたのだという。

竹川さんは異変に気づくと、信愛塾に呼び、好物のチキンライスを食べさせた。競技を諦めてほしくないと、スポーツ好きの職員、福島周さん(42)は毎週木曜に近くの公園でヨシと一緒にトレーニングをした。

そのうちに才能が開花した。高校2年の夏、県大会で優勝し、その後東場所。タケちゃん(竹川

の開設を手伝ってもらいアルバイトを始めた。手続きをしようとしても複数の金融機関から断られ、信愛塾を通じて区役所にも相談したという。口座ができたことで、困難を抱える高校生向けの奨学金も受けられるようになった。

「信愛塾は安心できる

定時制高校に進んだ後も続けたが、そのうち休みがちになった。「練習すればするほどおなががすいてしまう」からだ。自宅ではヨシの食事は用意されず、食事は小遣いでコンビニのおにぎりを京都内の全国大会に進んだ。結果は予選敗退となったが、競技を続ける励みになった。竹川さんは塾生初の快挙を喜び、県大会の表彰状のコピーを信愛塾の壁に飾った。金銭面も改善しつつある。竹川さんは単純に母を責めない。フィリピンでは、親不在の間は近所の

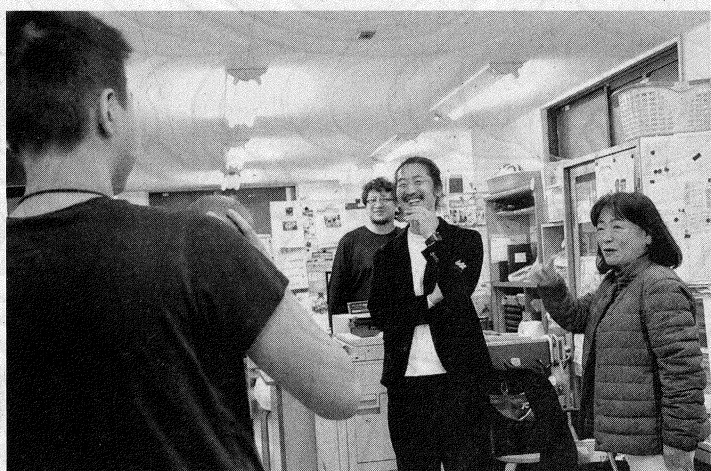
ほほえんだ。

竹川さんは単純に母を責めない。フィリピンでは、親不在の間は近所の人や親戚が子育てをする文化があることを考慮する必要があると訴える。

竹川さんは「日本ではお母さんはこうあるべき」という姿があるが、必ずしもそう言えないことも多い。親も生きていくために必死に働いている」と話す。日本では親が子の面倒を見るのは当たり前なため、こうした家庭は行政からも理解されづらく、孤立しがちだという。

一歩ずつ前進するヨシは、今も陸上競技の練習を続け、砲丸を投げ続けている。

「つづく



人や親戚が子育てをする文化があることを考慮する必要があると訴える。

竹川さんは「日本ではお母さんはこうあるべきという姿があるが、必ずしもそう言えないことも多い。親も生きていくために必死に働いている」と話す。日本では親が子の面倒を見るのは当たり前なため、こうした家庭は行政からも理解されづらく、孤立しがちだという。

一歩ずつ前進するヨシは、今も陸上競技の練習を続け、砲丸を投げ続けている。

＝つづく＝